

## 第7回 J-ReSS の終了報告と御礼

日本蘇生協議会  
会長 岡田和夫

平成 26 年 3 月 1 日（土）、第 7 回日本蘇生科学シンポジウム（J-ReSS）が、日本集中治療医学会会期中に京都国際会館にて同時開催されました。日本集中治療医学会理事長であり、同時に第 41 回日本集中治療医学会学術集会会長の氏家良人教授以下、多くのご協力者の全面的支援を頂き、素晴らしい会となりました。

まず 2015 年度版 ILCOR コンセンサス作成が、これまでの作成の手順から GRADE 法に代わり、それぞれ進捗している状況を、日本から各領域の Task-Force に参加しているメンバーから紹介して頂きました。WHO をはじめ世界の主要な学会のガイドラインの作成に GRADE 法が使われ始めております。GRADE 法は、Grading of Recommendations Assessment, Development and Evaluation の頭文字から取ったものであり、エビデンスの質と推奨の強さを系統的に評価するアプローチで、Gordon Guyatt ら GRADE Working Group により作成されました。今では 80 以上のガイドラインがこの手法で完成されております。国内にも国際的に認められた GRADE Working Group（相原守夫先生）があり、そのご紹介により、国立成育医療研究センター研究所の大田えりか先生にお話し頂きました。GRADE により更に透明性が高まり、アウトカム毎のエビデンス評価により、RCT 論文でも低い評価になることや、一方で質の高い観察研究が高い評価となり得ることも、その理由が説明されました。Task Force メンバーに加え、これから参加する Work Sheet 作成者にとって非常に参考となる時宜にかなった講演でありました。

氏家良人教授は、NPO 救命おかやまという医師、看護師、救急救命士、市民を網羅した組織を立ち上げられ、この会を通じた現場の生々しい声と訓練における新しい提案を話して頂きました。これは地についた救命活動があつてこそその構想であり、氏家教授が日々この重要性を認識されてできたセクションであります。まさしく新たに ILCOR が目指す流れに沿った企画であると思います。ガイドラインが次々と進んでも、蘇生の成果が必ずしも向上していないこともあり、市民を巻き込んだコースの新しい構想と実践が大切であることを見事に示して頂き、感銘深く拝聴致しました。

一般演題は 15 編のポスター発表であり、JRC 表彰の対象セッションでした。自験例、多施設集約試験のデータや、咽頭冷却法という日本初の新たな低体温療法に関する基礎実験が発表されて、いずれも甲乙をつけがたく優秀論文の選択に苦労致しましたが、以下の演題が選考されました。

最優秀賞：

岡山大学麻酔蘇生学講座 佐藤幸子：脳虚血中に開始した鼻咽頭冷却が神経細胞再分極時の細胞外グルタミン酸濃度に与える影響

同 溝上良一：脳神経細胞の再分極に必要な脳血流の閾値は脱分極を起こす脳血流の閾値よりも高い

脳細胞脱分極の生じる脳血流の閾値より再分極に必要な血流の閾値の検討から、咽頭冷却法が蘇生の手技として十分評価に耐えうる方法であることを示して頂きました。これは国内で開発された機器であり、外国製に伍して発展することが期待されます。研究モデルが同様であるため2名で1つの最優秀賞とさせて頂きました。

優秀賞2報告：

SOS-KANTO 2012 study group 本間洋輔：病院外心停止患者に対する接触時波形別の病院前薬剤投与についての検討

杏林大学総合医療学 宮内弘子：心原性院外心停止に対する救急救命士派遣の効果

京都国際会議場という素晴らしい会場で、準備万端でスムーズに会が進み、参加者はこれまでで最大で250名を超え、2階にも聴衆があふれていました。医師以外の多領域の医療従事者が参加されたのは、多職種に開かれた日本集中治療医学会でJ-ReSSが開催されたことも大きな要因であろうかと存じます。蘇生こそ、多職種の人々の共同連携で救命の連鎖がつながるということを、改めて教えられました。しかも2015年度版に備えてのガイドラインの勉強もできた欲張った会でありました。

日本集中治療医学会 氏家良人理事長、野々木宏実行委員長、岡本知子事務局長はじめ、学会の皆様とNPO救命おかやまの皆様のご尽力に心からお礼を申し上げます。